



エッセイ

複言語と向き合う子どもたち

オーストラリアで育つ日豪国際結婚家庭の事例

松井 美弥子 *

© 2022. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

私は 1980 年代の「移動する子ども」だった。父の仕事のため家族で二度オーストラリアに滞在した。幼稚園の時に 3 ヶ月、一旦帰国したのち小学校 1 年生の途中から再び父の転勤で 4 年余りオーストラリアで生活した。人口 1 万人ほどの田舎町で日本人学校はなく現地校に通った。アジア系の子どもが一人もいない中、まわりの子どもたちは物珍しそうに話しかけてきた。私と 1 歳年下の妹はカトリックの小学校に入り、3 歳年下の妹は地元のプレスクールに通った。どうやらオーストラリアには世話好きな子どもは多いようで、全く話せなかった英語が気が付けば話せるようになっていた。姉妹間の言語もあつという間に英語になっていた。

よく聞く話ではあるが、当時小学校に入ったばかりの時、先生が母に「家でも英語を話すように」と「アドバイス」をしたそう。そのアドバイスをまともに受けていたらと思うとぞつとする。その先生はきっと英語が話せなかった私たちに少しでも早く英語を身に付けてほしいという願いを込めてアドバイスをしたのであろう。

「数年したら帰国する」とよく母に言い聞かされていた。だから家の中では日本語を話した。日本から毎月通信教材が届けられる。「帰国して学校の授業についていけなかったら苦労するから。」そう母に言われて私と妹 2 人は毎日のようにダイニングテーブルに座り、母は隣で私たちに勉強を教えていた。帰宅後、勉強している子どもは私たちのまわりに誰一人いなかったと思う。近所の子は毎日りんごをかじりながらドアをノックして、「あそぼ」とやって来る。

* University of Wollongong 日本語講師 (E メール : miyako.matsui@my.jcu.edu.au)

「あそびたい」と思いつつ、断ることが多かった。いつか日本に帰ることはなんとなく分かっていたものの、どうしてあんなに難しい日本語の教材で勉強しなければいけないのか理解できなかった。

子どもの言語能力の高さにはいつも感心してしまう。11年前に当時4歳と3歳だった2人の息子連れてオーストラリアに移住したが、全く英語が話せなかった息子たちは気が付けば英語が話せるようになり、1年も経たないうちに兄弟間の言語は英語になっていた。先日シドニーで開かれた言語教員のためのカンファレンスに参加した。興味深かったのはNAPLAN (The National Assessment Program – Literacy and Numeracy) という小学3年生、5年生、中学1年生(7年生)と中学3年生(9年生)に実施される、いわゆる全国(オーストラリア)統一テストの結果だ。オーストラリアのほぼ全ての州で英語以外の言語背景をもつLBOTE (Language Background Other Than English)¹の子どもたちのreading, writing, spelling, grammar and punctuation, and numeracyの全ての項目において、LBOTEではない子どもたちよりも点数が高いというデータが出た。さらに、Fox, Corretjer and Webb (2019) や Bialystok (2018) などは、2つ以上の言語を駆使していると認知機能や学問でも効果が得られると述べている。

私の小学生時代の話に戻ると、オーストラリアから日本に帰国したのは1989年3月だった。日本では4月から6年生になる直前であった。オーストラリアの田舎町に住んでいたせいか、当時の私には日本のすべてが魅力的に思えた。帰国するのがなんとなく楽しみでもあった。4月になり、地元の公立小学校に私たち3人姉妹は通い始めた。近所の子どもたちと同じクラスに入れてもらい心強かった。しかし待ち受けていたのは憧れていた生活とは程遠いものだった。日本語が通じない。通じてても英語なまりの日本語。先生やクラスメートの言っていることも半分ほどしか分からない。必死で日本語を保持しようとがんばっていた母に申し訳ないくらい困った。ある時、クラスで遠足のグループやまわるコースの計画などを決めることになったが、一体どこに行くのか、誰が同じ班なのか分からないまま当日を迎えた。「じゃ、班に分かれて班別行動をしてください」と先生が学年全員に言って皆それぞれの班ごとに分かれて行動を開始した。案の定、私は誰と一緒にの班か分からず、半泣きで立ち尽くした。近所の子どもが「かわいそうだからうちの班に入れてあげよう」と言ってくれたのでついて行った。このよう

1 LBOTE (Language Background Other Than English) の子どもたち：英語以外の言語をバックグラウンドとして持ち、自分も自宅で英語以外を話す、あるいは自宅で保護者が英語以外を話す家庭の子どもたち。(抜粋：自治体国際化協会シドニー事務所, 2010, p.7)

なエピソードは山ほどある。

中学1年生になって英語が必須科目として加わった。「荒れている」公立中学校だったので、目立つと「不良」に目を付けられるので、英語もわざと片言のように話すようにして学校で目立たないようにした。アメリカ英語になじむのにも時間がかかったし、正直言って受け入れられなかった。綴りをアメリカ風に直したり(例: colour vs color, centre vs center)発音をアメリカンっぽくしないと通じない、あるいは点を引かれてしまう。その結果、英語力は著しく後退していった。帰国してから私たち姉妹は英語を保持するためにそれぞれ週に1回「外国語保持教室」に通った。帰国子女を集めて英語で授業をしていた。外国語保持教室に通っているもののそれ以外で英語を使う機会は全くなかった。日本語は相変わらず英語なまり、しかも英語も段々話せなくなっていく。宙ぶらりんな状態になっていった。

あれから30年ほどが経ち今に至るのだが、日本の短大を卒業した後、4年間オーストラリアの大学に留学し学部と修士の学位、教員免許を取得して、日本やオーストラリアで教員として過ごした。私自身の経験、幼い頃にオーストラリアに移住した息子2人の経験、さらには日本語を母語とする親を持つ子どもたちを教えた経験をもとに博士論文を書き上げた。題名は *Parental Involvement in Second-Generation Immigrant Children's Japanese Language Maintenance* 「第二世代の子どもの日本語保持における親の関与について」だ。オーストラリアで暮らしている日本人とオーストラリア人(英語話者)のパートナーとその子どもを対象にしたケーススタディを6家族に協力してもらい実施した。さらにそのような背景を持つ両親に育てられた4人の大人にも自身の経験を語ってもらった。

親の関与に焦点を当てて書いたのだが、日本語、日本文化保持に関して子どもがどう感じているのかもリサーチ・クエスチョンに入れてインタビュー調査をした。ここでは子どもたちがどのような思いで家庭やコミュニティで日本語と関わっているのかを簡潔に紹介したい。研究対象となった6家族の子どもたちは6歳から13歳の小学生から中学生の11人だ。それに加え、日本人とオーストラリア人の両親のもとに生まれた大人4人も子どもとしての経験を語ってくれた。その年齢層は18歳から47歳と幅広い。子どもたち(大人4人も含む)のインタビューから得た結果から以下の4点が浮かび上がってきた。

1. 自分自身が恥ずかしいし日本語が分からないから、外で親に日本語を話してほしくない。
2. 自分の日本語習得のために親にもっと日本語を使用してほしい。

3. 日本語を使ってうまく表現できない。
4. 日本語を上達させるためのモチベーションを見つけた。

1. 自分自身が恥ずかしいし日本語が分からないから、外で親に日本語を話してほしくない

家の外で日本人の親に日本語を話されるのに抵抗を感じている子どもがいることがこの研究から分かった。小学校低学年である子ども2人から得た結果であるが、そのうちの1人は「恥ずかしいから親に友達の前で日本語を話してほしくない」と述べている。一方でもう一人の子どもは、親が日本人の友達家族と外で話す時は日本語でなく英語で話してほしいと語っている。研究協力者である別の日本人の母親は自身の子ども2人も小学校低学年の時に家の外で日本語を使うことを拒んだと言っていた。Kondratiuk (2020)によると、このような言動はよくあることで7歳ぐらいになると他人の目を気にする年ごろだと述べている。これを述べた子どもたちは親が日本語を話すことに対して恥ずかしいと言っただけであって、自分自身が日本語を話すことが恥ずかしいとは言っていない。興味深かったのが、生まれた時から日本語を使って育てられた研究協力者の大人1人が日本人の母親と英語で話す方がむしろ恥ずかしいと語っていたことであつた。

11人のうち2人の子どもは日本人の親が使う日本語が分からないと言っていた。研究調査で家族間の言語の使用状況をビデオ撮影したのだが、そこで見られたのはその子どもたちが親に日本語で話しかけられても答えなかった様子であつた。また、4人の子どもたちは(先に出た2人も含む)日本人の親に日本語で話しかけてほしくないと答えた。しかし、先に出た2人以外の2人の子どもは自分達が理解できなかった時は日本語で話しかけてほしくないと思うそうだが、普段は日本語で話してもらうのは良いと思っている。

2. 自分の日本語習得のために親にもっと日本語を使用してほしい

上記1.とは矛盾するようだが、親が日本語を外で話すのは恥ずかしいと述べた2人の子どもは親に日本語を使ってほしいと願っている。外で日本語を話されるのは恥ずかしいが、自分自身が日本語を習得したいので、家では日本語をもっと話してほしいと語っている。

研究協力者の大人4人のうちの2人は、日本人の親にほぼ英語か、日本語と英語のミックスで育てられた。2人とも日本語をほとんど話せない。だから、日本語をもっと話せるようになりたかったと悔しさをにじませながら語ってくれた。そのうちの1人は日本人の母親は働

きに出ていて、オーストラリア人の父親が病気がちで家にいたので父親の英語に接する時間が長かったようだ。母親も電話で日本人の友達と話す時以外は英語で話していたので、自身は全くと言っていいほど日本語が話せないそうだ。もう1人は日本人の親が日本語で話しかけていたのに日本語で返すことができず、結局親も英語を交えながら話さなければならない状況になっていたことを残念に思っている。

3. 日本語を使ってうまく表現できない

1. で日本人の親が使っている日本語が分からないと述べた子どももいれば、自分自身が親と日本語で話すのが難しいと感じている子どももいた。親が話している日本語は理解できるのだが、日本語を使ってうまく言い表すことができないと感じている。表現できないから結果的に英語を使って答えることになるという。家族間の言語の使用状況を見ていたら、英語で返す子どもは日本語で言われたことに関して適切に答えているので日本語は理解していると考えられる。大人の研究協力者の1人は今は日本語をほぼ不自由なく話せるが、小学生の頃に日本語がなかなか習得できなかった時は英語を使って答えていたと語っていた。

この研究協力者の子ども1人は、日本で親戚と日本語で話さないといけない時になるとうまく表現できず不安になると言っていた。日本人の母親にいつも近くにいてもらい、日本語を話すのを手伝ってもらっていた。また、分からない言葉が出てくるとパニックに陥り、間違えるのも怖いと語っていた。大人の研究協力者1人も間違えると恥ずかしいと言っていた。

4. 日本語を上達させるためのモチベーションを見つけた

日本語を上達させるためのモチベーションを語ってくれた子どもたちが複数いた。最も多かったのが日本にいる親戚に会いに行くというのが子どもたちにとってのモチベーションになっているということだ。特に英語を話せない親戚とはどうしても日本語で話さなければならない。研究協力者のほとんどの子どもたちは日本にいる親戚に日本語で話しているそうだ。なかには祖父母と会ったことにより、オーストラリアに戻っても日本語を話したいと意欲的になる子どももいた。逆に祖父母と日本語を話さないといけないというプレッシャーを感じる子どももいた。一方でそのプレッシャーをポジティブに捉えて日本語で話す子どももいた。また、祖父母が日本語を褒めてくれたことによって自信がつく子どもも2人いた。

日本語を教えるオーストラリアの教育機関が子どもたちのモチベーションにつながっている

ケースもある。例えば、研究協力者 11 人の子どものうちには中学生が 2 人いたが、2 人とも同じハイスクールに通い、選択科目に日本語を履修していた。その結果、日本のポップカルチャーに興味を持ったり、自分の日本語に自信が持てるようになったりしたそうだ。地元の日本語の補習授業校（週に 1 回土曜日に開かれる 2 時間ほど日本語を使つての授業）に通っている子どもたちは日本語を使ったり、そこに通う子どもたちとつながることがモチベーションになっている。研究協力者の大人の 1 人は補習授業校が日本語上達に大きく貢献し、そこで知り合った友達と交流することが日本語維持のモチベーションになったと語っていた。一方で別の大人 1 人は補習授業校で日本語を学ぶのが嫌だったと語っていた。この人は親とは日本語でコミュニケーションを取っていたにも関わらず、補習授業校では両方の親が日本人というクラスメートがほとんどであったといい、劣等感を覚えたということだった。残り 2 人の大人の研究協力者は当時地元で日本語補習授業校がなかったので通えなかったと言っていた。その 2 人というのは先に述べた日本語がほとんど話せないと言ってくれた大人達だ。補習授業校に通っていたら日本語との触れ方も違っていたかもしれないと思う。

私は日本語教室も経営しており、その中に研究協力者の子どもは 3 人いた。日本語のかなや漢字を学び、日本語を使って表現できるようになったと言っていた。日本語が上達したという自覚が日本語を学ぶモチベーションになっているようだ。

研究対象の 1 家族は日本に行く度に子どもたちを日本の小学校に通わせている。たいてい 2 ヶ月から 5 ヶ月間という長期に渡って滞在する。学校や地域で同年代の友達と日本語で交流し、オーストラリアに戻ってからも次の日本行きのために日本語の教科書や教材を使って勉強するのが彼らのモチベーションとなった。この家族にとって日本に行く目的は他の家族と同様、祖父母や親戚に会うことはもちろんなのだが、日本の学校に通って同年代の子どもたちと過ごし、日本の生活を送ることでもある。

研究協力者の子ども 1 人はオーストラリアの学校に日本に関する物を持って行ったり、折り紙を披露したりすることで日本の文化にプライドを持つことができ、日本人としてのアイデンティティを築くことに役に立ったようである。学校の先生やクラスメートに、自分の披露するものに興味を持ってもらえることがモチベーションにつながっているようだ。

最近では家にいてもインターネットからアクセスできる日本語教材が増え、ソーシャルメディアで日本にいる家族や親戚などと気軽に連絡が取れるようになり、日本語が身近に感じられるようになった。子どもたちが世界のどこに住んでいようとこういったデジタル機器の発達

のおかげで日本語に触れる機会が増えた。それも、日本語保持やアイデンティティ形成に貢献していると思われる。

以上、家庭やコミュニティでの子どもの日本語保持状況を子どもの視点から、4点述べた。日本人とオーストラリア人(英語話者)の親を持ちオーストラリアで育つ子どもたちがどんな思いで日本語に触れているのか、子どもたちの声を聞く貴重な機会を得た。恥ずかしさ、表現の難しさ、プライドなど複雑な感情が入り交じりながらもここで取り上げた全ての子どもたちは日本が好きで誇りに思うと述べている。

私自身や幼い時にオーストラリアに移住した私の息子たち、そして研究協力者たちは皆日本とオーストラリアを「移動」しながら育った、または育っている人達だ。「移動する子どもたち」はこれからさらに増えるであろう。私は、彼らの複雑に交差する感情に寄り添いながら常にサポートできる立場にいたい。

文献

- 自治体国際化協会シドニー事務所 (2010). 『オーストラリア多文化主義政策交流プログラム 2010 報告書』 (pp.1-46).
- Bialystok, E. (2018). Bilingual education for young children: Review of the effects and consequences. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 21(6), 666–679. <https://doi.org/10.1080/13670050.2016.1203859>
- Fox, R., Corretjer, O., & Webb, K. (2019). Benefits of foreign language learning and bilingualism: An analysis of published empirical research 2012–2019. *Foreign Language Annals*, 52(4), 699-726. <https://doi.org/https://doi.org/10.1111/flan.12424>
- Kondratiuk, M. (2020). Phenomenon of self-consciousness and its development during infancy and childhood. *E3S Web of Conferences*, 164(12017), 1–9. <https://doi.org/10.1051/e3sconf/202016412017>
- Matsui, M. (2021). *Parental Involvement in Second-Generation Immigrant Children's Japanese Language Maintenance*. PhD thesis, James Cook University. <https://doi.org/10.25903/5t8r-s982>